

広域的な景観のコントロールに関する研究

秋田大学 学生員 ○児島 達也
秋田大学大学院 学生員 中野 靖明
秋田大学 正会員 木村 一裕

1. はじめに

近年,農村景観の魅力が再認識されている中で,広域的な優れた景観になる可能性が高いものが活かされていないと考えられる。平成16年6月に景観法が制定され,景観法を活かすために地方自治体や地域住民の参画による景観づくりが必要である。

そこで本研究では,典型的なパターンの景観を用いて,現状の景観と修景された景観を見比べコントロールすべきかどうかの評価を行うことで,人々が求めている景観とはどのようなものなのかを把握するとともに,コントロールする景観と内容について考察することを目的としている。

2. 調査概要

本研究では,秋田県内の景観のうち,広域的な景観を中心に典型的な11の景観を選定し,それぞれについて修景写真を作成した。図1に現状の景観(a)と修景内容((b)および(c))を示している。選定した景観の写真と,その修景写真を用いて,都市部と農村部で分けてアンケート調査を行った。調査概要を表1に示す。1つの景観は現状の写真と1~2枚の修景写真で1組となっており,1組全ての写真を見比べながら,統一感,開放感など9つの項目について,それぞれの写真ごとに評価をするとともに,残したい景観について回答してもらった。また,景観コントロールに対する意識についても評価を求めた。

表1 アンケート調査の概要

対象者	秋田市在住の学生(55人) 仙北市の住民(30人)
調査内容	(1)景観写真、修景写真についての評価 (2)景観コントロールに対する意識調査
調査目的	(1)残したい景観を明らかにする (2)コントロールすべき景観を明らかにする
評価写真	(1)11パターンの景観写真 (2)11パターンそれぞれの修景写真
5段階評価の 評価項目	(1)統一感がある (2)開放感がある (3)自然で癒される (4)歴史文化を感じる (5)都市的である (6)親近感がある (7)好ましい (8)コントロールが必要である
現状の写真、修景 写真から1つ選択	(9)残したい景観がある



図1 評価に用いた写真と修景方法

3. 景観のイメージ分析

修景した景観を対象に景観のイメージについて因子分析を行った。その結果を表2, 図2に示す。各評価項目の因子負荷量から,因子1は「親近感」,「自然で癒される」などの因子負荷量が大きいのので『やすらぎ』とし,因子2は「都市的」,「統一感」などの因子負荷量が大きいのので『機能性』とした。横軸に因子1,縦軸に因子2をとり,各パターンの景観の因子得点をもとに分布図を作成した。

表2 因子負荷量

項目	因子名	都市的	統一感	歴史文化	開放感	自然	親近感	好ましい
因子№1	やすらぎ	0.016	0.421	0.647	0.711	0.836	0.839	0.861
因子№2	機能性	0.455	0.403	0.266	-0.156	-0.218	-0.109	0.041

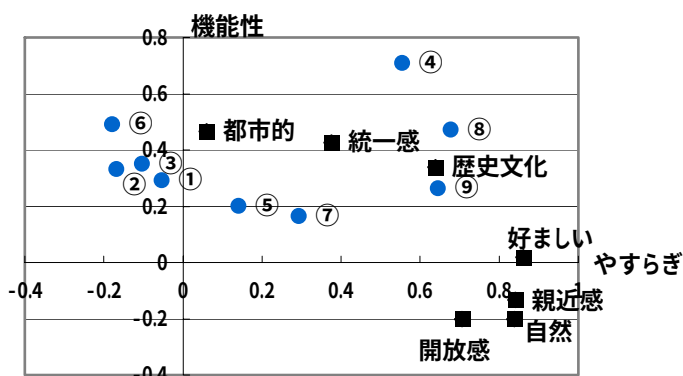


図2 各パターンの因子得点分布図

景観④,⑧は『やすらぎ』『機能性』の双方の因子が高く,景観⑨は歴史文化のイメージに近い。景観①,②,③,⑥は『やすらぎ』の因子が低く,景観⑤,⑦は『機能性』の因子が低い景観であることがわかる。

4. 残したい景観の評価分類

図3に11の景観について残したいと思う景観を示している。全体として景観①,②,④,⑧の景観が高く評価された。このうち景観④は「屋根を瓦屋根に統一(b)」と「さらに壁を真壁白漆喰塗りに統一(c)」の修景したものの割合が高い比率を占めた。

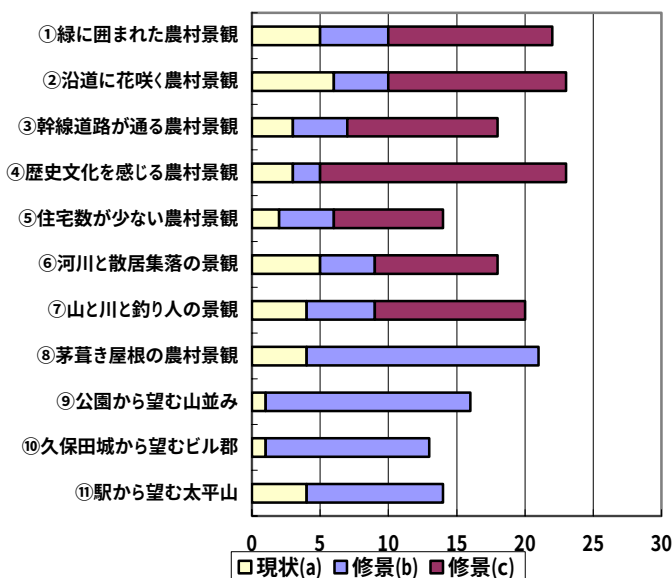


図3 残したい景観の評価

農村部の「残したい景観」で評価が高かった景観⑧と,評価が低かった景観⑥,また都市部で「残したい景観」の評価が高かった景観⑨の修景後のイメージ変化に着目した。その結果を図4に示す。景観⑧は屋根を茅葺き屋根に修景することで統一感と共に歴史文化のイメージが上がっている。景観⑥は屋

根・壁の色を修景したのみであり統一感のイメージは上がっているが,その他のイメージは大きな変化は見られなかった。また,景観⑨はマンションの高さを制限したことで都市的のイメージが下がり,公園の元来の開放感や自然のイメージが上がることにより「残したい景観」の評価が高かったと考えられる。

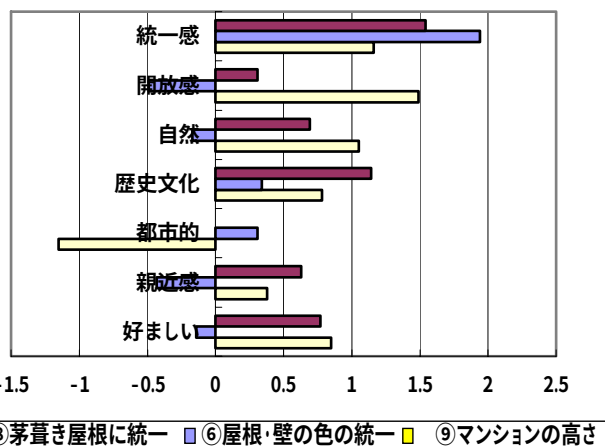


図4 修景後のイメージ変化

5. 景観保存意識に影響する要因

景観を残す,残さないの評価においてどのような要因が影響しているかを数量化Ⅱ類によって分析した。図5には景観③の結果を示している。相関比は0.5077である。図5に示す通り統一性,歴史文化,都市的のレンジが大きく,これらのイメージが残す,残さないの評価に影響を与えることが考えられる。

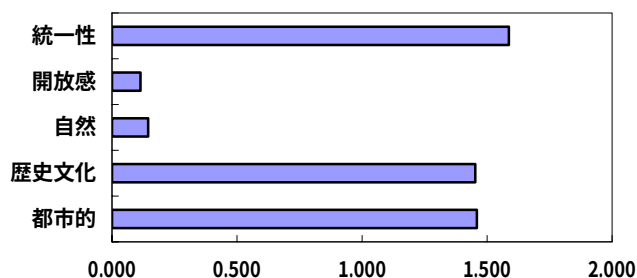


図5 景観③の項目別のレンジ比率

6. まとめ

本研究では,以下のことが明らかになった。

- (1)残したいと思わせるためには因子分析より,やすらぎと機能性のイメージが必要である。
- (2)残したい景観の評価より,修景したものの割合が高い比率を占めたことから,景観のコントロールが必要であるといえる。
- (3)保存意識に影響する要因として統一性,歴史文化,都市的のイメージがある。